

「日本の写真の開祖たち」

於 JCII 6階 会議室

会員番号1026 井桜直美

女性がカメラの横に立ち、撮影をしている様子が描かれた「開化人情鏡写真」と題された錦絵があります(画像1)。この女性は、東京で最初の女性写真師となった埜芳野の姿だともいわれます。明治9年に築地の新富座の裏に写真館を開業した女性です。当時はカメラにシャッターがありませんので、錦絵に描かれた女性が手に持っている丸い物はレンズのキャップです。これがシャッターの代わりでした。

日本に最初に定着した写真は、ウエットコロジオン法という技法の物で、ガラス板に薬品をぬって、カメラにセットし、レンズからキャップを外して露光します。最初にガラス板に塗る薬品には、アルコール成分が含まれているため、そのアルコール成分が乾燥しない1分から3分くらいの間に、露光と現像をしなければいけませんでした。光の加減にもよりますが露光時間は、数秒から数十秒かかったそうです。

この時代はまだ引き延ばし機はありませんので、大きな写真を作りたければ、大きなカメラと大きなガラス板、それを洗浄、定着させる器

具なども必要になります。風景を撮影するときは、写真の大きさに合う機材や携帯暗室をもっていかなければいけませんので、結構大変な作業だったようです。

今回はその技法を使って日本で最初にプロの写真家になった鶴飼玉川と下岡蓮杖、

そして上野彦馬を紹介します。当時は「写真家」ではなくて「写真師」と呼んでいました。この写真師3名が写真館を開業したのは今から150年以上も前のことになります。まずは一番最初に開業した鶴飼玉川を紹介します。

鶴飼玉川(画像2)は、1807年に江戸の小



画像1 錦絵「開化人情鏡 写真」
豊原周筆 明治11年



画像2 鶴飼玉川
アサヒグラフ臨時増刊「写真百年祭記念号」大正14年より

石川にあった府中藩邸で府中藩士の子供として生まれました。府中藩の府中は、現在の茨城県石岡市になります。若いころから古物や神社仏閣に古くからある仏像、書画骨董といったものに興味が深く、その鑑識に詳しくあったそうです。また谷文晁や渡辺華山、椿椿山などの当時の名流とされる画家たちとも親交がありました。

日本は1858年に日米修好通商条約を結び、横浜に外国人居留地ができました。そこへ各国の商人が少しずつ店を開き住み始めたのが、条約締結の2年後の1860年です。その年、玉川はその横浜居留地へ何か珍しいものを見ようと出かけたそうです。そこで、雑貨商を営むアメリカ人のO.E.フリーマンと知り合いました。

フリーマンはその雑貨商の片隅でお客様の肖像写真の撮影をしていました。雑貨商ですから、商品の中には写真機やそれに必要な薬剤なども輸入し、販売をしていました。玉川はすぐに写真に興味を持ち、フリーマンからその技法を学び、カメラや写真機材などを購入して、1861年に江戸の薬研堀に「影真堂」という写真館を開業しました。54歳の頃です。

営業期間は7年間ほどで、1869年に写真館を閉じました。肖像写真だけを撮影していたと思われるが、発見されている写真はと

ても数が少ないです。また、晩年に東京の谷中にある自分の家の墓の敷地内に、「写真塚」という塚を作り、自分が撮影した写真を埋めてしまいました。埋められた写真は、数百枚ほどであると伝えられていたそうです。

時を経て、その写真塚は昭和31年に調査され20枚ほどの写真が塚から発掘され現存しています。

次は下岡蓮杖です(画像3)。

この人は1823年に、伊豆下田に生まれました。幼いころから絵を描くのが好きだったそうで、縁あって日本画家の狩野董川に弟子入りすることが叶い、江戸に出ました。ある時、董川の使いで三田にあった薩摩藩島津家の屋敷



画像3 下岡蓮杖 アサヒグラフ臨時増刊「写真百年祭記念号」大正14年より



画像4 下岡蓮杖の写真館 馬車道の支店 アサヒグラフ臨時増刊「写真百年祭記念号」大正14年より



画像 5 上野彦馬

アサヒグラフ臨時増刊「寫真百年祭記念號」大正14年より

に出向いたとき、写真を見せてもらい衝撃を受けます。画家ですから当然見たこともない写真という画像に驚き興味をいだいて、自分も写真を写してみたいと考えます。そこで、外国人に近づいて写真術を学ぶ方法を探りますが、鎖国中の日本ではなかなかそのチャンスに恵まれず、7年の時が過ぎます。

ちょうどその頃、ペリー提督率いるアメリカ艦隊が浦賀沖に現れ、日本中が大騒ぎになりました。そして1854年、日本がついに開国となり日米和親条約が締結されると、下田港が開港地となります。それを知った下田出身の蓮杖は家族が心配になり下田へ向かいます。下田に着いたときは、ペリー提督一行はすでに日本を去った後でしたが、その後はしばらく家族と共に開港地となった下田で暮らすこととなります。

1856年に下田にある玉泉寺にアメリカ領事館が置かれました。蓮杖は写真術を教えてくれる外国人を探そうと、アメリカ領事館の御馳走掛となって働くことにしました。そしてアメリカ総領事ハリスの秘書兼通訳をしていたヒュースケンより、つたない英語と手真似で写真とカメラの原理を教えてもらいました。ヒュースケンには写真術について専門知識はなかったようで、このときは薬品の調合の仕方などまでは学ぶことができなかったようです。

そして2年の時が流れると、日米修好通商条約が締結され下田港が開港となり、次に横浜港が開港しました。玉泉寺の領事館も閉鎖となり、働く場所を失った蓮杖は、新しく開港した横浜へ向かいます。



画像 6 上野彦馬の父 上野俊之丞

アサヒグラフ臨時増刊「寫真百年祭記念號」大正14年より

横浜では、雑貨貿易商を営むアメリカ人ショイヤーのもとで働くようになりました。しばらくして、このショイヤーの家にジョン・ウィルソンというアメリカ人の写真家が訪れます。そこで蓮杖は、巨大なパノラマ画を描き、その絵とウィルソンが使っていたカメラや薬品、機材などを交換してもらいます。それが、1861年のことでした。その後、蓮杖は写真術の本格的な研究をすすめ、1862年に横浜の野毛で写真館を開業しました。39歳の頃でした。その翌年には、外国人居留地に近い弁天通り5丁目に写真館を移し、1867年には馬車道に支店を設け、その翌年には、弁天通2丁目にも支店を出します。

馬車道にあった支店の写真が残されています(画像4)。写真には、「全楽堂」という屋号の看板と「相影楼」と書かれた看板が写っています。蓮杖は晩年に写真雑誌のインタビューで、「ピクチャー」の日本語が「写真」という言葉に適していないと思っていたようで、『ピクチャーには、「相影」とか「影照」という名称があうと思っていたけれども、いつの間にか「写真」という言葉が定着してしまった』と答えていますから、「相影楼」と書かれた看板は「写真館」という意味かもしれません。

最後は上野彦馬です(画像5)。彦馬は1838年に長崎で生まれました。蓮杖より15歳年下になります。彦馬の父親は、長崎の御用商人でオランダ船からカメラを日本で最初に輸入した上野俊之丞です(画像6)。俊之丞は、彦馬が13歳の時に死去しますが、科学者でもあり火薬製造の事業に成功しています。彦馬にとって、父俊之丞の影響は大き

かったようで、彦馬は化学を好み、1858年に長崎の医学伝習所に入門しました。そしてある時、蘭書を読んでいるうちに「フォトグラフィ」という言葉を見つけ、興味を抱き、医学伝習所の塾頭である松本良順に頼み込み、ウエット・コロジオン法の写真撮影について研究をしました。最初はなかなか上手くいかなかったようですが、1859年に長崎に来たスイス人の写真家ロシエから写真術を学びます。そして蓮杖と同じ年の1862年に写真館を長崎の自宅に開業しました。24歳の頃です。横浜と違って、長崎の居留地には外国人が経営する写真館がなかったせいか、居留地から少し離れた彦馬の自宅でも、外国人客が次第に訪れるようになったそうです。

この3名が日本の営業写真の開祖となります。鶴飼玉川は弟子を持ちませんでしたが、下岡蓮杖と上野彦馬は多くの弟子を育て、その弟子たちがそれぞれに独立し、または来日した外国人写真家より直接学んだ写真師もその後誕生し、写真館が日本に増えていきました。

今年(2024年)は明治と改元されてから150年目にあたりますが、150年ほど前にこのような人たちがいたことを知っていただけたら幸いです。